

博士論文（要約）

論文題目 一休「像」の戦後史

—日本禅文化論の語る「伝統」と「近代」—

氏名 飯島 孝良

目 次

【まえがき】日本人を魅する「面構え」：個人的な体験から	11
【序章】メディアとしての一休「像」の創作とその意義―室町から戦後日本へ―	15
序.	16
一. 何故一休なのか：その「像」研究の意義	16
(1) 一休の「像」とその語りを分析すること：茶道との関係を例として 一休の「実像」は知りうるのか／一休は禅と茶道の接点？：『山上宗二記』における語り／禅宗史研究 における「語り」の捉え方：「虚構」ゆえの「真実」	
(2) 方法としての「像」形成史研究：聖書学と近代仏教研究において 「ファクトと異なる次元」に属する「像」／「伝統」の形成に関する三木清の看法／聖書学における 「像」の探究：「歴史的イエス」をめぐる／仏教研究における「像」への着目／「語られた」仏教者： 「宗祖」として、「人間」として／「語られた」一休への着目	
二. 一休「像」の形成過程	23
一休の「像」の多様性と時系列的な流れ	
(1) 『狂雲集』 一休の精神を表現する真筆／『狂雲集』の特徴／訳注本の概観	
(2) 『自戒集』 同時代の宗門に対する鋭い舌鋒	
(3) 仮名法語：一休に擬されたものの存在意義 仏説を平易に示すものとして珍重される／一連の仮名法語は一休に擬されたものか	
(4) 『一休和尚年譜』 直弟子の眼から描かれた師・一休／年譜や高僧伝にあるひとつの性格	
(5) 室町期における伝承 「行儀も心もかはり侍る」一休／養叟側の記述における一休の姿／同時代の宗門における一休評など	
(6) 徳川期における伝承 「名僧」一休の「像」の形成過程／「とんち坊主」への変化と浄土宗へ接近したイメージ／「とんち 坊主」一休の確立：『一休諸国物語』と『沙石集』との重なりを中心に	

(7) 近現代における伝承：敗戦直後に相次いで刊行される一休論 近代においても続く「快僧」のイメージ／戦後を契機として再び見出される「禅僧」一休	
三. 一休の「像」というメディアを通して何が語られたのか	38
(1) 一休研究と一休「像」研究：その相違点と相乗効果 一休「像」というメディアの多層性／可変的に表現されてきた「禅」と一休の「像」	
(2) 一休の「像」と戦後史の問い 一休「像」の形成史を描出する：「原理的な批判性をもった全体知」を求めて／「戦後」をどう捉えるか：「伝統」と「近代」を問い直す時代状況として	
(3) 本論の課題と方策 本論のねらい／各章の概略	
小結.	46
 【第一章】一休「像」の近代的「発見」—前田利鎌の「禅」と「修養」を手がかりに—	49
序.	50
一. 前田利鎌の立場と問題意識	51
(1) 前田利鎌とは誰か 生い立ち／上京と交流／学術への歩みとその最期	
(2) 前田利鎌の参禅：岡夢堂と「孤独」 夢堂との機縁／夢堂と卓の「孤独」	
(3) 臨済への看方：伝統に分け入る近代人の思索における真の「自由」 「殺仏殺祖」の精神に裏打ちされた「自由」／「臨済四料揀」への理解／否定即大肯定の論理／莊子への看方に通底するもの：一切の矛盾を包摂する「道」を認識する主体の確立／真の「自由」の問題：『宗教的人間』が問うもの	
二. 前田利鎌の存在意義	58
(1) 「修養」と居士禅：利鎌の背景をさぐる 「煩悶」と青年／「修養」と禅／「読む」ことと「修養」：洪川と宗演と大拙における／「修養」の変容：禅的修行と日常的実践のあいだ	
(2) 漱石と利鎌から教養派へ 円覚寺門下の「修養」観／漱石と利鎌との異なり：「修養」の視点から	
(3) 利鎌の影響：教養派の「型」について	

白川静の回想から／臨済：「随处に主となる」根源的な絶対自由人／莊子：絶対自由人としての「至人」

三．「一所不住の徒」一休への眼 72

(1) 利鎌の一休「像」

「何の蟠りも懸念もない」姿／「最も深い意味でのレアリスト」／「一所不住」ということ

(2) 「一所不住の徒」：イエス、芭蕉、サーニン、そして一休

イエス／芭蕉／サーニン／改めて一休：そして臨済へ

(3) 近代的知性による一休と禅の「発見」《IV. への架橋》

「一所不住」の普遍性／東西の枠を超えて人間の「自由」を近代の思想として考察／利鎌における「体験」から「修養」の問題へ

四．教養派文学における一休の「像」：武者小路実篤の場合 80

(1) 実篤における一休「像」の造形

利鎌と同時代人の触れた理想的人格：その基本姿勢／評伝『一休』成立の背景／実篤における一休の「像」にある特徴

(2) 実篤が一休の「像」を探究した背景をさぐる：利鎌との比較

実篤の文学における理想的人格の探究：宗祖を一介の人間として描出するということ／人間が「本来の姿」「本心通り」に生きるためには：トルストイ文学の問いかけるもの／利鎌との比較

(3) 「修養」から「教養」へ：唐木順三の指摘する「型」と近代西欧化との対峙の問題《第三章への架橋》

「型」としての「修養」／「型」を喪失した「教養」：唐木の批判点／「修養」としての居士禅と利鎌

小結. 92

【第二章】唐木順三の一休論における「伝統」と「近代」 93

序. 94

一．唐木の一休論：その特徴を示す鍵語 95

(1) 「近代」への視座

戦後体制への批判／「伝統」の端緒は室町期

(2) 「中世」

何故室町期か／室町期の「批評精神」としての一休

(3) 根源としての「虚無」

一休の批評精神：「虚無」の自覚／「虚無」という分析概念

(4) デカダンスとしての「風流」

「虚無」を見抜く精神としてのデカダンス／「風流」と「風狂」／「^{フィクション}虚構」を捉える精神としての「風狂」／自己を語る精神：近世の端緒として

二. 唐木の立場と問題意識 103

(1) 近代批判としての「中世」の発見：禅の位置づけ 《I-A. ならびに I-B. への分析考察》

過渡期としての「中世」：戦後日本との重なり／唐木における禅の位置づけ：中世以来の「伝統」として抽出

(2) 「虚無」からの創造は如何にして可能か 《I-C. ならびに I-D. への分析考察》

近代科学精神への批判：西欧におけるデカダンスの例／一休が浄土教へ接近したことについて／「識情苦」への着眼：「虚無からの創造」と三木清

三. 唐木における一休の「像」：その批判的分析 108

(1) 三木における大正教養派への批判：唐木との重なり

「伝統」以来の「型」を喪失した近代への批判：三木の論点／唐木『現代史への試み』の教養派批判

(2) 「虚無からの創造」へのアプローチ：唐木の分析を通して概観する三木の問題意識

三木の「宗教的要求」／「虚無」からの創造としての「構想力」／「デモーニッシュなもの」＝「パトス」

(3) 「虚無」への眼：創造的精神としての一休「像」形成

近代ニヒリズムと「^{フィクション}虚構」への視座／術語としての「虚無」を再考する／一休における「デモーニッシュなもの」：「識情苦」の問題

(4) 抽象される「伝統」：唐木の方法論的限界

唐木の「伝統」観と禅／三木の「伝統」観の継承として／唐木の「伝統」観にある方法論的限界

小結. 122

【第二章補論】近代批判としての「中世」の探究—戦中と戦後における実朝「像」の場合—

..... 124

一. 「中世」と「万葉調」：実朝への射程 124

語られる「中世」と実朝

二. 小林秀雄が希求したもの：戦中の煩悶と実朝「像」 125

小林の実朝論／吉本隆明による批判：小林における実朝の「像」にある恣意性／戦中における小林の立場と実朝の「像」：乱世に馴れ合わぬ「ヲロカニ用心ナキ」文学者として

三. 戦後日本における反省としての実朝「像」：加藤周一と中野孝次 128

加藤周一の実朝論にみえる小林秀雄への視線／中野孝次の実朝論における「ホモ・レリギオース」の謎

小結. 131

【第三章】戦後日本における中世禅文化論と一休の「像」 133

序. 134

一. 芳賀幸四郎の着眼：戦後における一休論の嚆矢として 135

(1) 芳賀の論述意図

その学生時代／中世文化史学と禅の研究へ／芳賀の戦後体験と一休への共感

(2) 「狂雲子一休とその時代」における論点

「すぐれて歴史的・社会的な存在」して／「民族史的個性」としての一休／「新しき歴史的生命力」をもたらした存在／一休の矛盾する「両極的性格」／「朱太刀像」における両極的性格の統合：「風狂」の僧として確立された一休／「悲劇的良心の自殺行為」としての一休の「狂」／「天才」一休：「英雄」たり得ぬ存在／室町文化における「伝統の超越」を代表する精神として：一休の感化と影響、或いは同時代的体験

二. 芳賀の問題意識と一休の「像」の対応関係：学術的問題と実存的問題 144

(1) 室町文化史研究としての側面

芳賀の看法とそれに対する後代の評価／芳賀の同時代認識としての「東山文化」論

(2) 人間禅教団師家の禅話としての側面

禅の現代性について：視野の世界性、教理の合理性、制度の民主性／デモクラシー・ヒューマニズムとしての禅と一休の「像」

三. 「東山文化」論と一休の「像」 148

(1) 「東山文化」研究の底流にある意識：反皇国史観と「民衆」への眼

室町時代をめぐる評価：武家のはびこる「暗黒時代」か、「国民意識」のルーツか／戦後の「東山文化」

評価：解放されて上下がないまぜになった民衆の文化として／「放下僧」「暮露」への着目／「明るい中世」史観における「民衆」の位置づけとそれに対する批判

(2) 市川白弦・玉村竹二の一休論と比較して

キーンの「東山文化」論における一休と禅の位置づけ／一休の頂相に見出されたもの：室町期の個人主義と写実主義の発露として

(3) 芳賀における一休の「像」の影響：ドナルド・キーンの「東山文化」論を例に

市川の視座：「形」への志向と「正統」への意識／市川の所論と玉村の一休御落胤説との対応／市川の所論と芳賀の所論との対応

(4) 一休の「像」が国際的に語られる意義：拡張される「禅と日本文化」

「美しい日本の私」に現われた一休の「像」／「仏界入り易く魔界入り難し」は一休の語か／西欧で「禅と日本文化」が語られるということ

小結. 161

【第四章】市川白弦の一休「像」―「即」の論理の批判的継承― 163

序. 164

一. 市川の遍歴 166

(1) 生い立ち

貧しい禅寺と反骨精神と西田哲学と

(2) 小笠原秀実との師弟関係

小笠原秀実とは誰か／秀実の弟・登

(3) 「般若空の心」について：禅とアナキズム

「なぜアナキストになったか？」：人間相互の交歓を楽しみ生命の真実を実現する自由を求めて／「般若心経意」の存在：何物をも許し何物をも育ててゆく「空の心」を謡うもの

二. 市川における問題意識と「即」の論理：西田哲学と大拙禅学の批判的継承として 174

(1) 「B・A・C」から「S・A・C」へ：「般若空の心」と「即」の論理とを通底するもの

「聖戦」における苦い体験から「B・A・C」の構想へ／「S・A・C」の構想：「般若空」の思想的展開

(2) 西田哲学への批判：絶対無の場所の哲学の功罪

西田最晩年の境地：事事無礙としての「絶対矛盾的自己同一」／西田哲学における「即」の論理への積極的評価／日本独自の「無の場所的文化」にある可能性を再考／「もっとも深い意味における民主的な自由連合」の萌芽として

(3) 大拙禅学への批判：戦争への絶対批判としての「無諍三昧」

東洋的「一」と太平洋戦争／「即非」の論理／大拙における「不二の自由」と「無諍三昧」／大拙における絶対批判としての「世間虚仮」と市川の問題意識

(4) 市川の批判点：「即」の論理の限界について

否定の論理と「でなければならぬ」の危うさ／西田哲学における近代合理精神との矛盾

(5) 「禅・華嚴・アナキズム」について

市川の重視する『靈性的日本の建設』：その所論／大拙における事事無礙の世界観／大拙の国体観をどうみるか：同時代における華嚴哲学の援用と比較して／事事無礙法界と「靈性的日本」の可能性を問い直す市川／西田・大拙における「即」の論理を戦後にどう活かせるか：市川による事事無礙の国家観の構想／戦後知識人における一休論の位置づけを再確認する

三. 「即」の論理の具現化としての「風流」：市川における一休の「像」 … 191

(1) 市川の一休読解

市川における一休の重要性／観点①：「般若空」に根ざす禅の伝燈を担う大自信と「殺仏殺祖」の精神／観点②：既成権力（在家に公案禅を安売りする主流派）への批判／観点③：「逆行」の徹底から「自己内返照」へ／観点④：「批判の重層性」

(2) 「風流」と「宿業」の矛盾的自己同一としての一休「像」

市川が定義する「風流」／市川における「宿業」と「そらごとたわごと」：『歎異抄』の受容

(3) 市川の一休論と「皇道禅」への看方

反・下剋上としての「保守反動イデオログ」：桜井好朗説への批判／「皇道禅」への冷静な看方と市川自身の問題意識

(4) 「即」の論理による「安心」と「自由」：「原点ヒューマニズム」としての「風流」

市川がみる一休の独自性について：正統への自負と体制批判に引き裂かれる「矛盾」／一休における「不風流処也風流」の境涯／改めて市川の構想した「原点ヒューマニズム」とは：一休の「像」に見出そうとしたもの

小結. … 206

【第五章】「禅文学」の試みとしての一休「像」—柳田聖山の視座を再考する— 211

序. … 212

一. 柳田の一休解釈 … 213

(1) 関心のはじまり：七十年代後半の柳田と一休への接近

日本を代表する禅学者として高まる権威／柳田×水上対談からみえるもの：柳田による一休「像」の

祖型／柳田の目指す一休の「像」：禅僧としての一休、漢詩人としての一休

(2) 柳田の一休論とその特徴

「美人」大燈？：正統への強い渴望と大自信の表明として／「男色」は法燈の受け継ぎ？／「風流」はエロスに非ずという解釈／もうひとつの正統への意識：『三体詩』を通した漢文学への傾倒／虚堂と大燈と許渾の位置づけ：自分と「ぴったり一致した」禅と詩の理解として

(3) 『狂雲集』は「宗教的エクスタシー」？：柳田の陥った袋小路

『狂雲集』は解釈無用？：自ら積みあげた論述や訳注の放棄／一休を「禅文学」として扱うということ：柳田独自の意味合い

二. ふたつの「禅学」：久松真一から承けた枠組 223

(1) 柳田の「戦後」：その足跡の黎明期について

久松との機縁：学道道場と「禅学即今の問題」／ドグマの解体としての「殺仏殺祖」

(2) 久松の禅学①：実証的史料研究

歴史という物語をつむぐ「虚構」を明らかにする知的な学問／津田史学の影響

(3) 久松の禅学②：「禅」そのものを体験して知る

「禅」そのものを明らかにする行的な実践／「主体的公案」の創造／「禅」そのものの現代的意義／久松から柳田に嗣がれたふたつの「禅学」

(4) ドグマの解体としての初期禅宗史研究：禅学者として確立されたもの

ドグマからの離脱を試みた柳田の六十年代／柳田自身の述懐／柳田における大拙への憧憬：文献研究と「禅そのもの」の語りは両立し得ないのか？

三. 「禅」そのものへの回帰 231

(1) 大拙の超克としての「禅思想史」構想

大拙の影：師と仰ぎ魔と呪う存在／大拙における盤珪禅と白隠禅への看方：自身が承けた公案における「経験」と「表現」の文脈化／大拙の公案禅研究における一休時代の位置づけ：「密参録」への着眼／柳田からみた「看話の思想史」：大拙×胡適論争への批判

(2) 「主体的公案」としての一休

一休・白隠・良寛は「未了の公案」？：大拙における位置づけとのズレ／自分と「ぴったり一致した」理解：久松以来の「主体的公案」の問題として

四. 宗門の「外」から批判する視座：一休と柳田の共通性とその問題 240

(1) 「正統」を語る批判的方法として

「禅」そのものを把握する方法論の確立を希求して：久松以来の立場への還帰／宗門の外から「正統」を求める一休の「像」：柳田が理想とした姿として

(2) 日本臨済宗の伝統にある文献学の可能性を求めて

論文「無著道忠の学問」／無著への親近感：柳田自身の立場の代弁

(3)「瞎驢辺滅却」の解釈にみえる問題：日本臨済禅の伝統をめぐって	
「像」研究としての先見性：一休の在り方を捉え直す方法としての可能性／柳田の『臨済録』理解と 伝統底の理解との異なり／「瞎驢辺滅却」をどのように捉えるか：臨済と一休の解釈に関わる問い／ 「抑下托上」をめぐって	
小結．	254
 【第六章】進歩派知識人における一休「像」の創作と「矛盾」の問題－戦後民主主義への 視座－	257
序．	258
一．水上勉『一休』の存在とその問題	258
(1)「一休和尚行実譜」の「創作」	
水上『一休』はあくまで小説作品	
(2)水上文学を探るヒントとして	
「どん底」で喘ぐ人びとへの眼／一休の「像」を捉える方法としての ^{フィクション} 小説	
(3)水上が一休を語る意図：宗門への怨嗟と苦しむ貧民への眼	
柳田聖山との関係：両者の学生時代にある苦い思い出／宗門の「外」にいることと貧民に寄り添うこ と：水上の希求した一休の「像」／ ^{フィクション} 小説という方法の強み：森女への大胆な挑戦	
二．唐木順三と加藤周一における森女の創作：点と点をつなぐ方法として	262
(1)森女の謎	
文献において確認できる森女の姿：『狂雲集』と『真珠庵文書』から／『一休和尚年譜』では語られな い森女：創作でしか描けない？	
(2)唐木順三「しん女語りぐさ」における一休「像」	
森女という謎の存在の口を借りて一休の「像」の謎を解き明かす試み／唐木が小説という方法を採用 たねらい	
(3)加藤周一による一休「像」の創作	
「ありうべき自己」としての一休：男女の交情を愉しみきる姿への憧憬／加藤の描き方：『狂雲集』の 積極的な利用／手法の転換と認識の深まり： ^{フィクション} 小説から禅の超越的哲学を捉える評論へ	

三. 加藤周一における一休の「像」と「矛盾」の問題 269

(1) 一休における「矛盾」への問い

内的経験 vs. 伝統的戒律／「矛盾」の深層：王孫の血脈と禅僧としての自覚に関する市川の分析と比較して／「矛盾」と「超越」への眼：一休と親鸞を通して考えられたもの《次節への架橋》

(2) 「親鸞問題」と「一休問題」：戦後知識人に通底するもの

近代知識人の「親鸞問題」：安丸良夫の視座から／「一休問題」：「矛盾」と「超越」に直面する人びと

(3) 進歩派知識人の直面した「矛盾」：他を信じることについて

信じることと「大衆」：加藤周一「親鸞」をめぐる／「親鸞問題」から「一休問題」へ：加藤における「他力」と「自力」の位置づけ／「超越的価値観」と時代認識：六十年代の加藤が直面したもの／加藤が「超越」へと向かった動機とは

小結. 281

【終章】禅門と俗世と一休の「像」―結語にかえて― 283

序. 284

一. 「語る」一休と「語られる」一休とを探究すること 284

(1) 各章の分析からみえた一休の「像」

戦後知識人が惹かれた一休とは：「伝統」と「近代」のあいだに見出された「像」／各章の分析を振り返る／本論のウラ主人公：西田幾多郎と鈴木大拙／戦後史における一休の「像」：大衆文化の求める語り

(2) 「禅者一休」と「一休さん」：宗門と俗世のあいだに

ふたつの一休の背景をさぐる加藤周一の眼／山田宗敏が遺したもの：大徳寺派内部で語られる一休の「像」

二. 一休を読み解くために何が求められているのか：その展望 291

(1) これまでの歩み

何故一休とその「像」を問わねばならないのか：本論の縁起／思索と体験と「像」という方法論／禅籍研究の必要／いま、一休をたずねる：パリでの再発見／「一休はどう読まれてきたか」：本論の着想源／「一休学」の構想／ひとつの宗教思想史として

(2) これからの歩み：「一休学」への冒険

「禅者一休」から「一休さん」の形成過程を再考するために／一休のことばと精神が醸成された思想空間の再現を目指して／同時代資料における宗門内の一休「像」／室町期の時代状況にたずねる：堺・

堅田を中心にして／世俗で「語られた」一休の拡がり／「禅文化」の形成史として一休とその「像」を考える

三. むすびとひらき 296

「瞎驢辺滅却」と一休／「狂雲面前、誰が一休を読む」

文献一覧 301

まえがき 日本人を魅する「面構え」：個人的な体験から

一休ほど、日本人に知られた僧はいないかもしれない。にもかかわらず——いや、だからこそ——その実相が掴み難い存在も、そういないのではないか。かく言う私も、幼少期から高校生くらいまで、「一休さん」が「とんち坊主」以上の存在と感じられたことはなかった。

その印象がガラリと変わったのは、大学に入ってはじめての夏休みであった。ガイドブックを片手に京都じゅうの寺を巡るひとり旅を敢行した私は、市内の有名な大伽藍に食傷気味となっていた。幾分の疲れをおぼえながら、旅の最後に南山城の京田辺市へ向かった私が辿り着いたのが、酬恩庵——またの名を一休寺——であった。二〇〇四年の晩夏のことである。

余り深く考えずに訪れたこの禅寺で、期せずして出逢ったのが、一休の木像と頂相であった。一休の自毛が直接植え付けられていたとされる木像の面構えを前にしたとき、大した知識のない人間にもその睨みがズドンと突き刺さってきた。それと対をなすかのように山門にあるのが、一休の墨蹟を石碑にした「諸悪莫作、衆善奉行」である。竹の筆で書ききった豪放磊落な書きぶりであるが、「狂雲」と自称するところとそぐわぬような生真面目な筆致にも思われた。

このとき、土産代りに売店で購入したのが「狂雲面前誰説禅」——狂雲の面前、誰が禅を説く——の短冊である。二十歳^{はたち}になったばかりの青二才にも、この一句が傲岸なほどに大自信を表明したものであること位は察しがついた。しかし、あの可愛い「とんち坊主」とおよそ結びつかぬこの「狂雲」は、どういうわけなのか——。帰京して、直ちに一休のことを調べだした。平野宗浄監修『一休和尚全集』（春秋社）を紐解いてみると、そこには破戒とエロスを繰り返す「風狂」の姿が縦横無尽に描かれている。反骨のエロ坊主という一休の「像」は、余りに魅力的な人格であった。

はじめて一休寺を訪れた一年後の夏、私は再びひとり旅に出る。一休の一生を辿ろうというのである。水上勉の『一休を歩く』（NHK 出版）をガイドブック代わりにして、京都、堺、大津の堅田、高槻の出灰山^{いずりは}、また京都市内に戻って、最後には再び一休寺へ、という旅路であった。ちょっとでも一休の息吹に触れようとするほど、惚れ込んでいた。だが、難解な禅語を偈頌へと編みあげた『狂雲集』や『自戒集』を読み解くには、余りに多くの労力と時間が求められると気づかされたのである。禅者としての一休を知るには、当然禅学の知見が要る。一休の生きた京都や堺や近江の時代背景を踏まえるためには、中世史学にたずねていかねばならない。語録ではなく漢詩で以て自らを表現した一休へは、漢文学のアプローチも求められる。……一休の実相は果たして知り得るのか、何度一休寺へ足を運んで一休の木像と「対話」を試みても、悩みは深まるばかりであった。だが、一休の面構えの奥底に悪戯っぽい好奇心を感じとり、一切を切り裂くばかりの鋭い眼光に貫かれたがために、ここま

で一休さんを追いかけることとなったのは、確かであった。

そんな中、諸々の研究書に触れる中で、或る事実に思い当たる。一休に魅かれた人は、何も自分だけではなかった。室町時代から近現代に到るまで、数知れぬ人びとが一休に惹きつけられ、語ってきた。一休が、どうしてこんなに日本人のところに突き刺さってきたのか。行実の詳細は知られずとも、その姿がいつまでも忘れられていないのはどういうわけか。これはむしろ、日本人の文化史的・思想史的な問題というべきものなのではないか——何故どのように一休が語られたのかを追いかけることで、ひとつの「禅文化」の変遷を明らかにしていけるのではないか。これが、本論の課題となった。

臨濟—【……】—松源—運庵—虚堂—大応—大燈—徹翁—言外—華叟—養叟—春浦—実伝
└一休

【臨濟宗大徳寺派法系略図】

【凡例】

- 一、本文中の年号は基本的に西暦に統一するが、必要がある場合は和暦も併記する。
- 一、本文中の表記は基本的に新字に統一するが、原文を尊重してそのまま引用する必要がある場合などは旧字で表記する。
- 一、本論で引用した一休の『狂雲集』『自戒集』ならびに仮名法語は、『一休和尚全集』（全五巻、春秋社、一九九七年～二〇一〇年）を参照した。
- 一、『狂雲集』に付された通し番号は、伊藤敏子の校合（「狂雲集諸本の校合について」、『大和文華』第四十一号、一九六四年）に準拠した。
- 一、『大正新修大蔵経』ないし『大日本続蔵経』より引用した場合、引用箇所はアルファベットと数字を用いて次のように略記する。
 - 【例】『大正新修大蔵経』第四七卷十一頁第二段目：[T47, 011b]
 - 『大日本続蔵経』第十卷二〇五頁第三段目：[X10, 205c]

【注記】

以下の内容については、加筆修正を経て、飯島孝良『語られ続ける一休像―戦後思想史からみる禅文化の諸相』(ISBN978-4-8315-1594-0)として、2021年7月30日にぺりかん社より出版された。

そのため、この注記を以て本文に替えることとする。

文献一覧

《※1》全集からの引用が複数にわたる場合、当該の全集の題名のみを表記する（引用箇所の詳細は本文中の注記に譲る）。

《※2》辞典類は割愛するが、大蔵経や続蔵経、ならびに禅籍等については次のデータベースを参照したことを明記しておく（二〇一八年三月一日確認）。

◆大蔵経電子仏典（CBETA）

<http://tripitaka.cbeta.org/>

◆大正新脩大蔵経テキストデータベース（SAT）

<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/satdb2015.php>

◆花園大学禅籍検索データベース「電子達磨」

<http://iriz.hanazono.ac.jp/newhomepage/daruma/index.html>

【I】一休に関連する一次資料

《全集》

平野宗浄監修『一休和尚全集全五巻』春秋社、一九九七年～二〇一〇年

森慶造参訂『一休和尚全集 全』光融館、一八九八年

石井恭二『一休和尚大全上・下』河出書房新社、二〇〇八年

《『狂雲集』関連》

森大狂編『一休和尚狂雲集』民友社、一九〇三年

伊藤敏子「狂雲集諸本の校合について」『大和文華第四一号』、一九六四年

市川白弦ほか編『中世禅家の思想』岩波書店、一九七二年

二橋進『一休 狂雲集』徳間書店、一九七四年

中本環『狂雲集・狂雲詩集・自戒集』現代思潮社、一九七六年

富士正晴『日本詩人選二七 一休』筑摩書房、一九七五年

柳田聖山『日本の禅語録十二 一休』講談社、一九七八年

柳田聖山『大乘仏典中国・日本篇二六 一休・良寛』中央公論社、一九八七年

《その他の一休関連》

鈴木大拙編『自戒集』延命会、一九四五年

今泉淑夫校注『一休和尚年譜1・2』平凡社、一九九七年

禅文化研究所編『一休道歌 みそひともじのりうた 三十一文字の法の歌』禅文化研究所、一九九七年

三瓶達司+禅文化研究所編『一休ばなし集成』禅文化研究所、一九九三年

中川一政・柳田聖山編『墨蹟一休宗純』中央公論社、一九八六年

『禅文化第七九号 風狂の禅者一休』、一九七五年

『国文学解釈と鑑賞第六一号第八号 風狂の僧・一休』、一九九六年

芳澤勝弘編『別冊太陽 一休一虚と実に生きる一』平凡社、二〇一五年

五島美術館編『特別展一休 とんち小僧の正体』カタログ、二〇一五年

【Ⅱ】前近代までの引用文献

青木馨編『大系真宗史料伝記編六 蓮如絵伝と縁起』法蔵館、二〇〇七年

飯田忠彦『野史第九』国文社、一八八二年

飯田忠彦（漆山又四郎訳）『訳文大日本野史第一』春秋社、一九四三年

已十子編『禅林句集』岩波書店、二〇〇九年

英俊『多聞院日記』竹内理三編『続史料大成第三八～四二巻』臨川書店、一九七八年

懷奘（水野弥穂子訳）『正法眼蔵随聞記』筑摩書房、一九九二年

蔭木英雄『訓注空華日用工夫略集一中世禅僧の生活と文学一』思文閣出版、一九八二年

季弘大叔（東京大学史料編纂所編）『大日本古記録 蔗軒日録（自文明十六年至文明十八年）』岩波書店、一九九六年

国文学研究資料館「吾妻鏡データベース検索」http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/G0001501azuma

古帆周信撰『臨濟録密参請益録』、写本（花園大学国際禅学研究所蔵）

駒澤大学文学部国文学研究室編『禅門抄物叢刊第九』汲古書院、一九七五年

慈円（丸山二郎校訂）『愚管抄』岩波書店、一九四九年

至道無難（公田連太郎編著）『至道無難禅師集』春秋社、一九五八年

心敬『ひとりごと』（奥田勲・表章・堀切実・復本一郎編『新編日本古典文学全集八八 連歌論集・能楽論集・俳論集』小学館、二〇〇一年）

雪江宗深（平野宗浄編）『雪江禅師語録』思文閣出版、一九八四年

莊子（福永光司訳）『中国古典選第七巻 莊子内篇』朝日新聞社、一九六六年

大慧宗杲撰・道謙編『大慧宗門武庫』禅文化研究所、二〇〇〇年

太極『碧山日録』竹内理三編『続史料大成第二十巻』臨川書店、一九八二年

潮音道海『霧海南針』森大狂・山田孝道校注『禅門法語集（下）』法融館、一九二一年

東京大学史料編纂所編『大日本古文書 大徳寺文書別集真珠庵文書之一』東京大学出版会、一九八九年

白隠慧鶴（道前宗閑編）『槐安国語上・下』禅文化研究所、二〇〇三年

ハビアン（海老澤有道・井出勝美・岸野久編）『キリシタン教理書』教文館、一九九三年

早川光三郎訳注『新釈漢文大系第五九巻 蒙求下』明治書院、一九七三年

林秀一訳注『新釈漢文大系第四七巻 戦国策上』明治書院、一九七七年

林羅山『梅村載筆』『日本随筆大成第一期第一巻』吉川弘文館、一九七五年

正木篤三『本阿弥行状記と光悦』中央公論美術出版、一九九四年

松ヶ岡文庫所蔵『禅籍抄物集全二五巻』岩波書店、一九七六年～一九七七年

松尾芭蕉（杉浦正一郎・宮本三郎・荻野清校注）『日本古典文学大系第四六巻 芭蕉文集』岩波書店、一九五九年

万安英種撰『臨濟録萬安抄』、一六三二年

夢窓疎石（川瀬一馬校注）『夢中間答集』講談社、二〇〇〇年

山上宗二（熊倉功夫校注）『山上宗二記』岩波書店、二〇〇六年

落語研究会編『落伍名作揃』盛陽堂、一九一二年

『禪門逸話選下』禪文化研究所、一九八七年

『大徳寺禪語録集成第一巻』法蔵館、一九八九年

『大日本仏教全書第一〇三巻 本朝高僧伝』国書刊行会、一九一三年

【Ⅲ】近現代以降の引用文献

赤松常弘『三木清 哲学的思索の軌跡』ミネルヴァ書房、一九九四年

秋月龍珉『世界の禪者―鈴木大拙の生涯―』岩波書店、一九九二年

足立栗園『批判的日本仏教史』警醒社、一八九九年

アルツィバーシェフ、ミハイル（昇隆一訳）『アルツィバーシェフ名作集』青娥書房、一九七五年

飯塚大展「大徳寺派系密参録について（一）―『雲門録百則』を中心にして」『宗学研究第三十六号』、一九九四年

――「龍谷大学図書館蔵『大徳寺夜話』をめぐって（一）―資料編―」『駒澤大学禅研究所年報第十号』、一九九九年

――「『碧岩類則』について―資料編（一）」『駒澤大学仏教文学研究第四号』、二〇〇一年

――「中世林下における語録抄と密参録について（上）」『駒澤大学仏教学部論集第三四号』、二〇〇三年

――「禅籍抄物研究（六）―駒澤大学図書館蔵『大圓禅師夜話』について―」『駒澤大学禅研究所年報第二一号』汲古書院、二〇〇九年

――「一休宗純研究ノート（三）―『一休水鏡』から『一休咄』へ（上）―」『駒澤大学禅研究所年報第二二号』、二〇一〇年

――「禅籍抄物における和歌の引用について：林下曹洞宗における相伝史料を中心にして」『駒澤大学佛教学研究第十七号』、二〇一四年

市川白弦『市川白弦著作集全四巻』法蔵館、一九九三年

――『禅と現代思想』徳間書店、一九六七年

――『一休―乱世を生きた禅僧―』NHK 出版、一九七〇年

――『仏教者の戦争責任』一九七〇年、春秋社

今泉淑夫「『イタカナモノ』について」『歴史と地理昭和五六年九月号』、一九八一年

――「書評『芳賀幸四郎歴史論集全五巻』」『日本歴史 第四二八号』、一九八四年

入矢義高『増補版 求道と悦楽』岩波書店、二〇一二年

内田弘「三木清の戦時レトリックと戦時日本論」『社会科学年報第四一号』、二〇〇七年

海老坂武『加藤周一―二十世紀を問う』岩波書店、二〇一三年

- 王成『〈修養〉の時代の読者と漱石文学』立教大学大学院文学研究科博士論文、一九九八年
- 大野順一「不期山人唐木順三 その思索のあと」『駿河台文芸第十三号』、一九九三年
- 岡倉天心（富原芳彰訳）『東洋の理想』（『茶の本 日本の目覚め 東洋の理想—岡倉天心コレクション』筑摩書房、二〇一二年
- 小川煙村・倉光空喝編『名士禅』小川柳枝軒書店、一九一〇年
- 小川隆『神会』臨川書店、二〇〇七年
- 『臨済録 禅の語録のことばと思想』岩波書店、二〇〇九年
 - 『語録の思想史 中国禅の研究』岩波書店、二〇一一年
 - 「茶道と禅語」（『ゆきま第九十一号』）不白流白和会、二〇一五年）
 - 『禅思想史講義』春秋社、二〇一五年
 - 「敦煌文献と盤珪一大拙の禅思想史研究」『季刊禅文化第二三七号』、二〇一五年
- 小笠原秀実「なぜアナーキストになったか？—哲学者小笠原秀実氏の場合—」『平民新聞一九四六年第十・十一合併号』、一九四六年十二月
- 『純粹美学原論』創生閣、一九二四年
 - 『近代思想原論』弘道閣、一九二六年
 - 『西洋倫理学史』東進書院、一九三八～三九年
 - 『体認の哲学』有光社、一九四三年
 - 『禅文化の体系』昭森社、一九四四年
- 小田切秀雄『万葉の伝統』講談社、一九八八年
- 何燕生「近代的な物語における臨済および『臨済録』—方法論的考察—」『『臨済録』国際学会論文集』禅文化研究所、二〇一六年
- 垣花秀武「加藤周一君よ」『現代思想二〇〇九年七月臨時増刊号 総特集・加藤周一』青土社、二〇〇九年
- 加藤周一『加藤周一著作集全十六卷』平凡社、一九七八年～一九八〇年
- 『加藤周一自選集全十卷』岩波書店、二〇〇九年～二〇一〇年
 - 『羊の歌—わが回想—正・続』岩波書店、一九六八年
 - 『日本文学史序説上・下』筑摩書房、一九九九年
 - 「金槐集に就いて」、二〇〇九年
 - 加藤周一『三題噺』筑摩書房、二〇一〇年
- 加藤周一・柳田聖山『日本の禅語録第十二巻 一休』講談社、一九七八年
- 加藤二郎『漱石と禅』翰林書房、一九九九年
- 唐木順三『唐木順三全集増補版全十九巻』筑摩書房、一九八一年～一九八二年
- 『三木清』筑摩書房、一九四六年
 - 『中世から近世へ』筑摩書房、一九六一年
 - 『新版現代史への試み』筑摩書房、一九六三年
 - 『無常』筑摩書房、一九六五年
 - 『詩とデカダンス』講談社、新版一九六六年

- 『日本人の心の歴史（下）』筑摩書房、一九七〇年
- 唐木順三編『日本の思想第十巻 禅家語録集』筑摩書房、一九六九年
- 唐木順三×水上勉「一休」『展望二一一号』筑摩書房、一九七六年七月
- 川端康成『美しい日本の私—その序説—』講談社、一九六九年
- 「舞姫」『川端康成全集第十巻』新潮社、一九八〇年
- 紀平正美『日本精神と弁証法』青年教育普及会、一九三二年
- キーン、ドナルド（金関寿夫訳）『日本人の美意識』中央公論新社、一九九九年
- （角地幸男訳）『足利義政と銀閣寺』中央公論新社、二〇〇八年
- キーン、ドナルド×司馬遼太郎『日本人と日本文化』中央公論社、一九八四年
- クラウタウ、オリオン編『戦後歴史学と日本仏教』法蔵館、二〇一六年
- グラック、キャロル（梅崎透訳）『歴史で考える』岩波書店、二〇〇七年
- 黒板勝美「室町時代の文化的概観」、史学地理学同攷会編『室町時代の研究』星野書店、一九二三年
- 胡適（柳田聖山編）『胡適禅学案』、一九七五年
- 小西甚一「風流と風狂」『岩波講座日本文学と仏教第五巻—風狂と数寄—』岩波書店、一九九四年
- 小林秀雄『実朝』『小林秀雄全作品第十四巻』新潮社、二〇〇三年
- 桜井好朗『隠者の風貌』塙書房、一九六七年
- 「乱世の狂気 一休宗純における政治と美学」『日本名僧論集第十巻 一休・蓮如』吉川弘文館、一九九三年
- 釈宗演「禅の境地」『新小説臨時増刊号 文豪夏目漱石』、一九一七年一月
- 『宗演禅話』禅話叢書刊行会、一九二〇年
- 白川静『白川静著作集第十二巻』平凡社、二〇〇〇年
- 鈴木大拙『鈴木大拙全集』岩波書店、一九六八年～一九七一年〔『同増補新編全四十巻』岩波書店、一九九九年～二〇〇三年〕
- 『鈴木大拙禅選集全十二巻』春秋社、二〇〇一年
- 曾我量深『歎異抄聴記』東本願寺、一九九九年
- 高島米峰『一休和尚伝』文明堂、一九〇四年
- 竹内洋『教養主義の没落—変わりゆくエリート学生文化—』中央公論新社、二〇〇三年
- 『革新幻想の戦後史』中央公論新社、二〇一一年
- 太宰治『惜別』新潮社、一九七三年
- 田中貴子『中世幻妖』幻戯書房、二〇一〇年
- 田中祐介「思考様式としての大正教養主義—唐木順三による阿部次郎批判の再検討を通じて—」『国際基督教大学学報アジア文化研究第三十号』、二〇〇四年
- 玉村竹二『五山文学 大陸文化紹介者としての五山禅僧の活動』至文堂、一九六一年
- 『日本禅宗史論集上・下』思文閣出版、一九七九年
- 「書評 芳賀幸四郎著『中世禅林の学問および文学に関する研究』」『日本仏教史(2) 一九五七年五月号』

- 辻善之助『日本仏教史第六巻 中世篇之五』岩波書店、一九五一年
- トルストイ、レフ（中村白葉・中村融訳）『トルストイ全集愛蔵決定版全二十巻』河出書房新社、一九七二年～一九七八年
- 内藤湖南「応仁の乱に就いて」『日本文化史研究（下）』講談社、一九七一年
- 中川徳之助『髑髏の世界 一休宗純和尚の跡をたどる』水声社、二〇一三年
- 永島福太郎『初期茶道史覚書ノート』淡交社、二〇〇三年
- 中野孝次『実朝考—ホモ・レリギオーズスの文学』講談社、二〇〇〇年
- 中村俊定「学寮時代の恩師」『文藝論叢十四号』文教大学女子短期大学部現代文化学科、一九七八年
- 中本大「一休の生涯／文献案内」『国文学解釈と教材の研究第四一巻八号』、一九九六年
- 夏目伸六『父と母のいる風景一統 父・漱石とその周辺』芳賀書店、一九六七年
- 夏目漱石『漱石全集』岩波書店、一九九四年～一九九六年
- 仁木宏『空間・公・共同体 中世都市から近世都市へ』青木書店、一九九七年
- 西田幾多郎『西田幾多郎全集増補改訂版全十九巻』岩波書店、一九六五年～一九六六年
- 野上豊一郎ほか「世阿弥能楽論研究（十）」『文学第五巻第十一号』岩波書店、一九三七年十一月
- 芳賀幸四郎『芳賀幸四郎歴史論集全五巻』思文閣出版、一九八一年
- 「禅籍をいかに読むか」『講座禅第六巻 禅の古典—中国』筑摩書房、一九六七年
 - 『禅入門』たちばな出版、一九九五年
 - 『禅の心・茶の心』たちばな出版、一九九六年
- 長谷川興蔵・月川和雄編『南方熊楠男色談義 岩田準一往復書簡』八坂書房、一九九一年
- 林屋辰三郎『中世文化の基調』東京大学出版会、一九五五年
- 原勝郎『東山時代における一縉紳の生活』筑摩書房、一九六七年
- 原田正俊『日本中世の禅宗と社会』吉川弘文館、一九九八年
- 久松真一「禅学即今の問題」『禅文化研究所紀要第一号』、一九六九年
- 「湘山老師と現代の禅」『禅文化第八六号』、一九七七年
- 菱木政晴『極楽の人数 高木顕明『余が社会主義』を読む』白澤社、二〇一二年
- フェノロサ、アーネスト・F（有賀長雄訳）「日本に於ける理想派美術（足利時代）」、『東亜美術史綱下巻』フェノロサ氏記念会、一九二一年
- 福田恆存×加藤周一「日本の民主主義をめぐる」『福田恆存対談・座談集第二巻』玉川大学出版部、二〇一一年
- 福永光司『莊子 古代中国の実存主義』中央公論社、一九六四年
- 『中国古典選第七巻 莊子内篇』朝日新聞社、一九六六年
- 古田紹欽『一休』雄山閣、一九四四年
- 『禅と茶の文化』読売新聞社、一九七〇年
 - 『禅文化講義』人文書院、一九八五年
- 前田利鎌『宗教的人間』雪華社、一九七〇年
- 『臨済・莊子』岩波書店、一九九〇年

- 牧野信之助『武家時代社会の研究』刀江書院、一九二八年
- 松本皓一『宗教的人格と教育者』秋山書店、二〇一四年
- 松本文三郎「煩悶と自殺」『新小説第十一年第十一卷』、一九〇九年十一月
- 三木清『三木清全集全十九卷』岩波書店、一九六六年～一九六八年
- 三島由紀夫『小説とは何か』『三島由紀夫全集第三三卷』新潮社、一九七六年
- 武者小路実篤『武者小路実篤全集全二十五卷』新潮社、一九五四年～一九五七年
- 『武者小路実篤全集全十八卷』小学館、一九八七年～一九九一年
- 『一休さん』少年少女講談社文庫、一九七四年
- 『釈迦』岩波書店、二〇一七年
- 水上勉『新編水上勉全集全十六卷』中央公論社、一九九五年～一九九七年
- 『一休』中央公論社、一九七五年
- 『破鞋 雪門玄松の生涯』岩波書店、一九八六年
- 『一休文芸私抄』朝日出版社、一九八七年
- 水上勉×柳田聖山「禅と人間——一休のことなど」『海 一九七四年三月号』中央公論社、一九七四年
- 水上勉×柳田聖山『人生と宗教と文学と』日本実業出版社、一九七七年
- 森達也『たったひとつの「真実」なんてない』筑摩書房、二〇一四年
- 森末義彰『東山時代とその文化』秋津書房、一九四二年
- 安田理深『信仰についての問と答—第四集』文栄堂、一九六九年
- 安丸良夫・喜安朗編『戦後知の可能性』山川出版社、二〇一〇年
- 柳田聖山『柳田聖山集第一卷～第五卷』法蔵館、一九九九年～二〇一七年
- 「無著道忠の学問」『禅学研究第五五号』、一九六六年
- 『初期禅宗史書の研究』法蔵館、一九六七年
- 「臨濟義玄の人間観—『臨濟録』おぼえがき—」『禅文化研究所紀要第一号』、一九六九年
- 「祖堂集ものがたり〈5〉洞山僧堂のストライキ」『禅文化第五五号』、一九七〇年
- 『仏典講座三十 臨濟録』大蔵出版、一九七二年
- 『禅の語録第十卷 臨濟録』筑摩書房、一九七二年、月報
- 「わたしの真宗学」『曾我量深選集第九卷』大法輪閣、一九七二年、月報
- 「禅の語録と歴史」『世界の名著続三 禅語録』中央公論社、一九七四年
- 『禅思想 その原型をあらう』中央公論社、一九七五年
- 「無字の周辺」『禅文化研究所紀要第七号』、一九七五年
- 「新統灯史の系譜 叙の一」『禅学研究第五九号』、一九七八年
- 『一休「狂雲集」の世界』人文書院、一九八〇年
- 『中世漂泊』法蔵館、一九八一年
- 『禅と日本文化』講談社、一九八五年
- 『沙門良寛—自筆本「草堂詩集」を読む—』人文書院、一九八九年
- 「狂雲集—その仕掛けについて—」『岩波講座日本文学と仏教第五卷—風狂と数寄—』岩波書店、一

九九四年

——「一休・風狂の構造一詩と禅の色あげ」『禅文化研究所紀要第二一号』、一九九五年

——「私の五十年一花園大学最終講義一」『禅文化第一六〇号』、一九九六年

——「日本の靈性としての良寛」『良寛道人遺稿』中央公論新社、二〇〇二年

柳田聖山先生追悼文集刊行会編『柳田聖山先生追悼文集』禅文化研究所

山田宗敏『大徳寺と一休』禅文化研究所、二〇〇五年

——『日本臨済禅開祖一休和尚』禅文化研究所、二〇〇五年

山田無文『臨済録』禅文化研究所、一九八四年

横井清『東山文化一その背景と基層一』平凡社、一九九四年

吉川幸次郎校注『漱石詩注』岩波書店、二〇〇二年

吉川勇一『民衆を信ぜず、民衆を信じる』第三書館、二〇〇八年

芳澤勝弘「画賛解釈についての疑問一五山の詩文はどう読まれているか」『禅文化研究所紀要第二五号』、二〇〇〇年

——「仙翁^{せんのおけ}花 室町文化の余光（１）～（３）」『禅文化第一八五～一八七号』、二〇〇二～二〇〇三年

——「江湖という精神世界」『禅文化一九〇号』、二〇〇三年

——「「瞎驢禅」の意味（上・下）」『中外日報』二〇一五年五月二十九日付・同六月五日付

——『東陽英朝 少林無孔笛訳注第一巻』禅文化研究所、二〇一七年

——「白隠学に向けて」http://iriz.hanazono.ac.jp/k_room/k_room01a.html

吉本隆明『源実朝』筑摩書房、一九九〇年

和辻哲郎『和辻哲郎全集増補版全二七巻』岩波書店、一九八九年～一九九二年

【IV】 参考文献

《論文等》

芦川進一『『罪と罰』における復活一ドストエフスキイと聖書一』河合文化教育研究所、二〇〇八年

——『ゴルゴタへの道 ドストエフスキイと十人の日本人』新教出版社、二〇一一年

——『カラマーゾフの兄弟論一砕かれし魂の記録一』河合文化教育研究所、二〇一六年

安住恭子『『草枕』の那美と辛亥革命』白水社、二〇一二年

阿部次郎『阿部次郎全集全十七巻』角川書店、一九六〇年～一九六六年

網野善彦『無縁・公界・楽——日本中世の自由と平和』平凡社、一九七八年

——『日本中世都市の世界』筑摩書房、一九九六年

荒井献『イエスとその時代』岩波書店、一九七四年

荒井正雄「西田哲学と華嚴思想 一純粹経験・場所の論理と華嚴の四種法界・三界唯心の比較検討一」『哲学と教育第五五号』、二〇〇七年

安良城盛昭『幕藩体制社会の成立と構造』御茶の水書房、一九五九年

——『封建社会成立史論上』岩波書店、一九八四年

荒畑寒村『平民社時代』中央公論新社、一九七七年

- 安藤嘉則『中世禅宗における公案禅の研究』国書刊行会、二〇〇一年
- 安藤礼二「大拙（五）」（『群像二〇一七年七月号』講談社、二〇一七年
- 石井公成「大東亜共栄圏の合理化と華嚴哲学（一）一紀平正美の役割を中心にして」『仏教学第四二号』、二〇〇〇年
- 「祖師禅の源流一老安の碑文を手がかりとして」『禅学研究第八十号』、二〇〇一年
- 「「禅と日本文化」という図式の先蹤一伊達自得と鳥尾得庵の活動」『駒澤大学禅研究所年報第十五号』、二〇〇三年
- 「宗教者の戦争責任一市川白弦その人の検証を通して」『岩波講座宗教第八巻 暴力』岩波書店、二〇〇四年
- 石丸悟平『人間親鸞』蔵経書院、一九二二年
- 井上ひさし『道元の冒険』新潮社、一九七一年
- 今西祐一郎『死を想え 『九相詩』と『一休骸骨』』平凡社、二〇一六年
- 彌永信美『大黒天変相一仏教神話学Ⅰ』法蔵館、二〇〇二年
- 『観音変容譚一仏教神話学Ⅱ』法蔵館、二〇〇二年
- 「唯一の神と一つの世界一近代初期日本とフランスにおける比較神話学のはじまり」（中川久定編『「一つの世界」の成立とその条件』財団法人国際高等研究所、二〇〇七年）
- 岩山泰三「一休「寒鴉」詩群表現生成試論」『国文学研究第一二二号』、一九九七年
- 上田閑照『西田幾多郎とは誰か』岩波書店、二〇〇二年
- 内田弘「三木清の戦時レトリックと戦時日本論」『社会科学年報第四一号』、二〇〇七年
- 塩谷菊美『語られた親鸞』法蔵館、二〇〇一年
- 大桑斉編『史料研究 雪窓宗崔一禅と国家とキリシタン』同朋舎、一九八四年
- 大澤絢子「大正期親鸞文学における「人間親鸞」像の変容」（『現代と親鸞第二九号』、二〇一四年）
- 大澤真幸・斎藤美奈子・橋本努・原武史編『一九七〇年転換期における『展望』を読む一思想が現実だった頃一』筑摩書房、二〇一〇年
- 大谷栄一「日蓮はどのように語られたか？一近代日蓮像の構築課程の文化分析一」（幡鎌一弘編『語られた教祖：近世・近現代の信仰史』法蔵館、二〇一二年）
- 大谷栄一・吉永進一・近藤俊太郎編『近代仏教スタディーズ』法蔵館、二〇一六年
- 大貫隆『イエスという経験』岩波書店、二〇〇三年
- 岡雅彦『一休ばなし とんち小僧の来歴』平凡社、一九九五年
- 小笠原篤実『真宗教示三章弁』西村空華堂、一八七八年
- 『大経聖訓講話』法蔵館、一九〇九年
- 荻原隆「日本における伝統的ナショナリズムは可能か一丸山真男と津田左右吉（下）」『名古屋学院大学論集人文・自然科学篇第五一卷第一号』、二〇一四年
- カー、エドワード・H（清水幾太郎訳）『歴史とは何か』岩波書店、一九六二年
- 柏木隆法『千本組始末記』平凡社、二〇一三年
- 「市川白弦随聞記」上杉清文・福神研究所編『Fukujin 第十七号』、二〇一四年

加藤僖一「柳田聖山先生の良寛研究」『禅文化研究所紀要第三十号』、二〇〇九年

川嶋將生「「東山文化」の誕生：その言説の成立」『アート・リサーチ7』、二〇〇七年

岸川俊太郎「滞米初期における永井荷風の「思想混乱」の解明に向けて 姉崎嘲風、ワーグナー、メレシコフスキイの同時代受容の分析を通して」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊第二四号第一号』、二〇一六年

衣川賢次「柳田先生の『祖堂集』研究」『禅文化研究所紀要第三十号』、二〇〇九年

倉田百三『出家とその弟子』岩波書店、一九一六年

栗田彦彦「国際日本文化研究センター所蔵静坐社資料一解説と目録」『日本研究第四七号』、二〇一三年

グレイス、ステファン『鈴木大拙の研究：現代「日本」仏教の自己認識とその「西洋」に対する表現』駒澤大学大学院人文科学研究科仏教学専攻博士論文、二〇一四年

クローチェ、ベネデット（羽仁五郎訳）『歴史の理論と歴史』岩波書店、一九五二年

河野広中「決断力と禅」（小川煙村・倉光空喝編『名士禅』小川柳枝軒書店、一九一〇年）

恋田知子『仏と女の室町 物語草子論』笠間書院、二〇〇八年

興禅護国会ホームページ <http://philos.la.coocan.jp/zazen/kozengokokukai.htm>

神津朝夫「「茶禅一味」説の再検討」（天野文雄編『禅からみた日本中世の文化と社会』ペリカン社、二〇一六年

小坂国継『西田哲学の基層 宗教的自覚の論理』岩波書店、二〇一一年

小路田泰直『日本史の思想』柏書房、一九九七年

小堀南嶺「鈴木大拙先生を想う」西谷啓治編『回想鈴木大拙』春秋社、一九七五年

小森嘉一「心学に関する文献」『心学昭和十七年六月号』、一九四二年

子安宣邦『歎異抄の近代』白澤社、二〇一四年

斎藤希史『漢文脈と近代日本』KADOKAWA、二〇一四年

坂口尚『あっかんべー一休』講談社、一九九六年

佐藤研『悲劇と福音』清水書院、二〇〇一年

島蘭進「近代日本の修養思想と文明観—新渡戸稲造の場合—」（脇本平也・田丸徳善編『アジアの宗教と精神文化』新曜社、一九九七年）

末柄豊「室町文化とその担い手たち」『日本の時代史（十一） 一揆の時代』吉川弘文館、二〇〇三年

末本文美士「天皇信仰と仏教—杉本五郎『大義』をめぐる一—」『アンジャリ第十号』親鸞仏教センター、二〇〇五年

末本文美士編『妙貞問答を読む ハビアンと仏教批判』法蔵館、二〇一四年

タイセン、ゲルト（大貫隆訳）『新約聖書 歴史・文学・宗教』教文館、二〇〇三年

瀧田浩「武者小路実篤の戯曲『或日の一休和尚』—すでに捨てていて、そして駆ける—」『国文学解釈と鑑賞第六一第八号』、一九九六年

田澤英蔵「唐木順三の内なる三木清」『駒澤短大文庫第十七号』一九八七年

竹内仁「阿部次郎氏の人格主義を難ず」『現代日本文学大系第四十巻』筑摩書房、一九七三年

太刀川清「諸国物語の成立過程」『長野県短期大学紀要第三九号』、一九八四年

- 立平衡「本屋の見たる碧巖集」『禅道第七一号』、一九一六年六月
- 立田英山『人間形成と禅』人間禅教団、一九五九年
- 立松和平『道元禅師 上・下』東京書籍、二〇〇七年
- 田中博美「茶道大成期における堺と南宗寺の位置」(『茶道学体系2 茶道の歴史』淡交社、一九九九年)
- 「圓悟克勤の墨跡」(『松ヶ岡文庫研究年報第十七号』、二〇〇三年)
- 玉井敬之「法蔵院時代の漱石私註」『同志社国文学第七号』、一九七二年
- 田村圓澄『法然上人伝の研究〔新版〕』法蔵館、一九七二年
- 土屋太祐「『一夜碧巖』第一則訳注」『東洋文化研究所紀要第一六七号』、二〇一五年
- 「『一夜碧巖』第二則訳注」『東洋文化研究所紀要第一六九号』、二〇一六年
- 「『一夜碧巖』第三則訳注」『東洋文化研究所紀要第一七一号』、二〇一七年
- 筒井清忠『日本的「教養」の運命』岩波書店、一九九五年
- 寺澤浩樹『武者小路実篤の研究—美と宗教の様式』翰林書房、二〇一〇年
- 東郷豊治編著『良寛全集』東京創元社、一九五九年
- ドゥミエヴィル、ポール(林信明訳)『花園大学国際禅学研究所研究報告第一冊 ポール・ドミエヴィル禅学論集』、一九八八年
- 名和達宣「歴史家・安丸良夫と「親鸞問題」」『教化研究第一五九号』二〇一六年
- 新渡戸稲造(桜井鷗村訳)『武士道』丁未出版社、一九〇八年
- 野上彰『囲碁太平記』河出書房、一九六三年
- 波多野精一『基督教の起源』岩波書店、一九〇八年
- 檜谷昭彦『井原西鶴研究』三弥井書店、一九七九年
- 福島和人『近代日本の親鸞—その思想史—』法蔵館、一九七三年
- 藤田美実「文学と革命と恋愛と哲学と：一冊の本の源流を尋ねて」『立正大学文学部論叢第八十巻』、一九八四年
- 藤吉慈海「FAS 禅について」『印度学仏教学研究第二五巻第一号』、一九七六年
- 「FAS 禅の特色」『印度学仏教学研究第二九巻第二号』、一九八一年
- 『現代の浄土教』大東出版社、一九八五年
- ブランドス、ゲーオア『黎明期の思想家』宮原晃一郎訳、春秋社松柏館、一九四二年
- ブルトマン、ルドルフ(川端純四郎・八木誠一訳)『イエス』未来社、一九六三年
- ペリカン、ヤロスラフ(小田垣雅也訳)『イエス像の二千年』講談社、一九九八年
- 前川亨「看話のゆくえ—大慧から顔丙へ」『専修大学人文科学年報第三七号』、二〇〇七年
- 「中国思想史研究の立場からみた柳田聖山の位置—達成された成果と残された課題—」『禅文化研究所紀要第三十号』、二〇〇九年
- 「美と修養—鈴木大拙とルース＝ベネディクトの接点を求めて—」『専修人文論叢第八八号』、二〇一一年
- マクレー、ジョン『虚構ゆえの真実』大蔵出版、二〇一二年〔原版 *Seeing through Zen*, University of California, 2003.〕

- 升信夫「明治中期「修養」の類型化」『松蔭法学二十二巻一号』、二〇一五年
- 三浦圭一『中世民衆生活史の研究』思文閣出版、一九九一年
- 宮榮二編『良寛研究全集』象山社、一九八五年
- 宮嶋蓬州（資夫）『禅に生くる』大雄閣、一九三二年
- 『雲水は語る』大雄閣、一九三四年
- 『新篇禅に生くる』大法輪閣、一九四一年
- モンテイロ、ジョアキン「市川白弦論・現代仏教における社会倫理の問題を中心に」『駒澤大学禅研究所年報第十二・十三号』、二〇〇二年
- メレジコフスキイ、ドミートリイ（植野修司訳）『トルストイとドストエフスキイ』雄渾社、一九六八年～一九七〇年
- モール、ミシェル「近代「禅思想」の形成—洪岳宗演と鈴木大拙の役割を中心に—」『思想第九四三号』岩波書店、二〇〇二年
- 八木康敏『小笠原秀実・登一尾張本草学の系譜—』リプロボート、一九八八年
- 「真理は勲章をさげない—小笠原秀実事始—」『虚無思想研究第四号』、一九八四年
- 矢内一磨『一休派の結衆と史的展開の研究』思文閣出版、二〇一〇年
- 「一休宗純『自戒集』の語彙とその比喩するもの—堺布教の問題を中心に—」（全国大学国語国文学会編『文学・語学第二〇七号』、二〇一五年）
- 「一休の純粹禅と断法思想」『中外日報』二〇一五年三月十三日付
- 柳田聖山×中川一政「一休を語る—独創のための独走—」（『禅文化第一二二号』、一九八六年）
- 柳田宗葩『一会の茶』大東出版社、一九八六年
- 山折哲雄『教えること、裏切られること 師弟関係の本質』講談社、二〇〇三年
- 山田奨治『禅という名の日本丸』弘文堂、二〇〇五年
- 横倉譲治『湖賊の中世都市—近江国堅田』誠文堂新光社、一九八八年
- 吉田道興「日本文化と禅僧たち—「禅文化」の成立と展開」（西山美香編『アジア遊学第一四二号 古代中世日本の内なる「禅」』勉誠出版、二〇一一年）
- 李聖傑『川端康成の「魔界」に関する研究—その生成を中心に—』早稲田大学大学院社会科学部研究科博士論文、二〇一三年
- ルナン、エルネスト『イエス伝』岩波書店、一九四一年〔原版 *Vie de Jésus*, Paris: Michel Lévy Frères, libraires-éditeurs, 9e édition, 1863.〕
- 鷲巢力『加藤周一を読む 「理」の人にして「情」の人』岩波書店、二〇一一年
- 《資料集・雑誌類等》
- 『朝日ジャーナル一九八三年三月四日付号』
- 『小笠原登—ハンセン病強制隔離に抗した生涯—』東本願寺出版局、二〇〇三年
- 『岡田式静坐法』実業之日本社、一九一二年
- 『花園大学三十年のあゆみ』花園大学、一九七四年
- 『平民新聞』復刻版、黒色戦線社、一九八二年

「いのちの願いーハンセン病資料館が語るものー」NHK 教育『こころの時代』一九九三年六月二七日放送
〔二〇一一年一月三十日再放送〕

《欧文文献等》

COLLINGWOOD Robin G. *An Autobiography*, Oxford University Press, 1939.

—— *The Idea of History*, Oxford: Oxford University Press, 1946.

COLLCUTT Martin, *Five Mountains: The Rinzai Zen Monastic Institution in Medieval Japan*, Cambridge: Harvard University Press, 1981.

DAVIN Didier, *L'expression de soi dans la poésie bouddhique japonaise du XVe siècle : Ikkyū Sōjun (1394-1481) et le Kyōun-shū*, la thèse de doctorat de l'École pratique des Hautes études (Section des sciences religieuses), 2013.

FAURE Bernard, « À nos lecteurs. » dans: *Cahiers d'Extrême-Asie*, vol. 7, 1993. *Numéro spécial sur le Chan/Zen*. En l'honneur de Yanagida Seizan.

FENOLLOSA Ernest Francisco, *Epochs of Chinese and Japanese Art: An Outline History of East Asiatic Design*, California: Stone Bridge Press, 2007[first published in 1912].

Ikkyū, *Nuages fous*, traduit par Maryse et Masumi Shibata, Paris : Éditions Albin Michel, 1991.

IVES Christopher, *Imperial-Way Zen: Ichikawa Hakugen's critique and lingering questions for Buddhist ethics*, Honolulu: University of Hawai'i Press, 2009.

KEENE Donald, "The Portrait of Ikkyū" in: *Archives of Asian Art XX* (1966/1967), Honolulu, University of Hawai'i Press, 54-65.

MCRAE John R. « Yanagida Seizan's Landmark Works on Chinese Ch'an. » In: *Cahiers d'Extrême-Asie*, vol. 7, 1993. *Numéro spécial sur le Chan/Zen*. En l'honneur de Yanagida Seizan.

MARALDO John C. "Questioning Nationalism Now and Then: A Critical Approach to Zen and the Kyoto School." In *Rude Awakenings: Zen, the Kyoto School, & the Question of Nationalism* by HEISIG James W. and MARALDO John C., Honolulu: University of Hawai'i Press, 1994.

SAWADA Janine Anderson, "Political Waves in the Zen Sea : The Engaku-ji Circle in Early Meiji Japan" in: *Japanese Journal of Religious Studies*, 1998, 25/1-2

SUZUKI Shunryu, *Zen Mind, Beginner's Mind: Informal Talks on Zen Meditation and Practice*, Corolado : Weatherhill, 1970.

ROBERT Jean-Noël, *La hiéroglossie japonaise*, Paris : Collège de France / Fayard, 2013

VICTORIA Brian Daizen, *Zen at War*. New York & Tokyo: Weatherhill, 1997[Second Edition, 2006].

〔※邦訳（新装版）はエイミー・ルイーゼ・ツジモト訳『禅と戦争』えにし書房、二〇一五年〕

Deux siècles d'histoire de l'École des langues orientales, Paris, Hervas, 1995.

Cahiers d'Extrême-Asie, vol. 11, 1999-2000.

Le Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient, vol. 86, 1999.

《自著論文》（本論中引用分）

飯島孝良 「「ゲラサの豚群」の宗教思想的展開：ドストエフスキイ『悪霊』を通して」『東京大学宗教学年報』

第三〇号』、二〇一三年

——「鈴木大拙の禅思想史観を再考する視座：一九三〇年代から四〇年代の記述を中心に考える」『東京大学宗教学年報第三二号、二〇一五年

——「一休皇胤説と岐翁実子説」『一休和尚年譜』にみえる一休の姿」「一休の著作—『狂雲集』『自戒集』そして仮名法語—」「一休はどう読まれてきたか—その像の系譜—」芳澤勝弘編『別冊太陽 223 一休—虚と実に生きる—』平凡社、二〇一五年

——「西田哲学における〈統一〉概念とボードレールの影響関係：その覚書」『東京大学宗教学年報第三三号、二〇一六年

◎その他、示唆を与えられた関連文献は少なくないが、ここでは本論中で多少なりとも言及したものに限って列挙した。学恩を賜った数多くの著書と先生方へ、改めて深謝申し上げます。

論文の内容の要旨

論文題目 一休「像」の戦後史

—日本禅文化論の語る「伝統」と「近代」—

氏名 飯島 孝良

本論の課題は、「禅」イメージの歴史的形成過程を明らかにするため、とくに日本文化史で語られた「禅」を、中世後期の禅僧・一休宗純（一三九四年～一四八一年）とその「像」の形成過程に即して具体化することにある。アニメなどを通じてその名が知られている一休は、実像について謎が多い存在である。一休自身のことばを録した『狂雲集』『自戒集』では破戒的でエロティックな精神がみられながら、直弟子たちが記述する『一休和尚年譜』では生真面目な師として語られるなど、その実相は容易に掴み難いのである。

必須である『狂雲集』や『自戒集』の研究は措いて、禅学・文学・中世史学（文化史学）・思想史学などの分野から個性ある一休論が提出され続けたのが、戦後の言論状況であった。戦後の一休論に共通する特徴は、一休における批判精神や反体制的姿勢や独立不羈の境地への着目である。戦争体験が生々しく、敗戦後が一種の乱世と思われた知識人にとっては、その反骨と独立不羈の「像」そのものが、各自が思索する大きな範例となったのではないか。

それは、一休そのものの研究と一休の「像」の研究とを橋渡しする試みであるとともに、一休の「像」を通して近現代の日本で「禅文化」がどのように語られたかを思想的に明らかにする試みとなる。とりわけ、太平洋戦争をはさんで前景化する一休の「像」とその問題意識から、戦後日本における思想的諸問題を明らかにしようと試みた。

まず、一休在世当時～室町期～徳川期～近現代に到るまで、一休の遺した文献としてどのようなものがあるか、そして一休の「像」を語った文献にはどのようなものがあるかを整理し、宗教研究の方法論としての「像」の分析の意義を検討した【序章】。一休自身のことばから、同時代の宗門内の評価（『大徳寺夜話』など）や世俗における伝承などでは破天荒な姿として伝えられ、のちに「とんち坊主」へと変容していった文献的な変遷をたどった。

そのように一休は前近代から近代に到るまで語られてきたが、「禅者」一休を近代的知性を以て論じた先蹤として、前田利鎌を取り上げた【第一章】。ニーチェ哲学を先駆的に研究したひとりでありながら、居士として熱心に参禅した利鎌の臨済論は、伝統的な臨済禅理解としても、或いは「人間」臨済の精神における「自由」や「主権」を鋭く見抜いた論述としても着目される。そのように見出された「自由」の体现者として一休を取り上げ、イエスやサーニンとともに「一所不住の徒」であるとした利鎌の所論は、近代的「修養」の一類型ともいえるものである。これとは対照的に、性善説的な理想的人格として一休を取り上げる教養派文学——その代表の武者小路実篤——を分析し、いわば大正期から昭和期に到るまでの「修養」と「教養」の相違点を一休の「像」から検討した。

このように参禅などの鍛錬によって「型」を自己に打ち立てていく「修養」に較べて、「教養」が新文化を妄信して伝統を軽視することを「型」の喪失と看做し、そこから軍国主義や皇国体制の台頭をゆるしたものと批判したのが、唐木順三である【第二章】。唐木は「近代」の末路としての太平洋戦争を反省し、一切が無に帰した戦後に新たな文化と思想がどのように確立されるかを構想していた。そのため唐木の中世文化論は、戦後の状況下で改めて「伝統」の源泉を問い直すものとなり、焦点を「下剋上」の世に身分を越えて能楽や作庭など新たな文化を創出した「中世」に当て、その「中世」で大いに受容された「禅」に着目するのである。即ち、すべてを灰燼に帰す応仁・文明の乱世において「虚無」を見出し、そこから新たな文化を芽吹かせるような室町期を代表する精神のひとつに一休が位置づけられたのである。唐木の一休論ないし中世文化論における「虚無からの創造」という着想の内実と背景を明らかにしつつ、戦後直後の言説における「伝統」と「近代」の位置づけを分析した。

唐木と同様、敗戦を機に一切の価値観の顛倒——戦前ならば「狂」と看做されていたような反体制的な姿勢が、敗戦後には一種の常識と看做される時代状況——に愕然としたのが、歴史家の芳賀幸四郎であった【第三章】。中世文化史を専門とする一方で人間禅教団の師家でもあった芳賀もまた、戦時体制へ批判の眼を向けるうえで一休の所謂「狂」に共感を覚えていた。更にここには、戦前の歴史学における皇国史観への反省もみられた。下剋上の世である中世都市の環境ではあらゆる身分や職種が混交し、むしろ最下層民の習慣や風俗や芸

能が「東山文化」として昇華され定型化された、とみられたのである。御落胤でありながら、階級をまたいで縦横無尽に世の腐敗を批判した一休こそ「東山文化」の象徴とされた。このようにして、唐木における中世文化への着眼は、芳賀などの「東山文化」論における反皇国史観的意識へ深まり、或いは「下剋上」の時代にあって新たな文化の担い手になる「民衆」への着眼につながっていく。そうした戦後歴史学の問題意識を帯びた一休の「像」と「東山文化」論が、ドナルド・キーン氏らの所論にも強く影響していたこと——更には「禅と日本文化」という枠組そのものが国際的に語られること——を、批判的に考察した。

唐木や芳賀のみならず、禅学者の市川白弦もまた、戦時体制への絶対批判（自他ともに批判）として一休の精神に学んだひとりである【第四章】。とりわけ市川は、西田・大拙における「即」の論理（と時代認識）を批判的に継承しようとする強い問題意識を有していた。西田や大拙を受容しつつ、小笠原秀実における「般若空」のアナキズムをも引き受けていった市川は、「空—無政府—共同体論」を構想するとともに、「空」（垂直の自由）と「無政府・共同体論」（水平の自由）との交点に打ち立てられる「原点ヒューマニズム」を体現する範例として、一休の「風流ならざる処も也た風流」の精神——ドロドロしたところで生き抜こうとすることがそのまま高邁な自在洒脱の境涯ともなること——を措定する。そのように、「仏土は遠く離れた無限の彼方にしか無いから、即ち今＝此処が仏土である」という——「AはAでないからAである」という——「即」の構造として世界を捉えようと試みた市川のも思想と一休論の関係を分析した。

このように相次いで提出された一休論に対して、厳密な文献分析に則って初期禅宗史研究を切り開いていった柳田聖山は、従来とは異なる一休の解釈を提示した【第五章】。禅学や中国文学の文献学的知見を用いた解釈は、破戒やエロスを悉く禅と漢詩文の「伝統」の表現であると看做すものであった。そのように宗門のドグマとは一線を画して戦後の科学知に基づく分析は斬新なものと評価されたが、その背景にも柳田自身が理念とした——久松真一の下で受容し、鈴木大拙に影響された——禅がみられた。即ち、歴史学かつ文献学で探究されるべきものであると同時に、公案に打ち込むことでしかわからぬ体験知でもある、というものである。その結果、一休を理解する際にも「解釈無用」の「宗教的エクスタシー」として味わうべきと論じるに到った。このような柳田における一休の「像」とその問題意識としての禅の捉え方を分析し、その功罪を考察した。

そもそも一休の『狂雲集』は難解を以て知られるが、そこに独特の魅力があったことは水上勉や加藤周一をして小説を書かしめたことから感ぜられる【第六章】。これらは森女（に関する表現）を通じて一休のエロスと詩想に肉迫しようとしたものであり、多少不明な部分があっても、詩句という“点”を創作という“線”でつなごうとしたといえるものであった。唐木や加藤は、一休の「像」についてはじめ小説としてしか描かなかった部分を、評論として深めていった。このなかで一休は、「破戒」と「持戒」、「悟り」と「エロス」、「大自信」と「自己批判」、「世捨人」と「世事への毒舌家」、「自力」と「他力」などと複数の位相で「矛

盾」を抱える存在と捉えられていく。そうした「矛盾」を「超越」しようとして詩作を重ねていく禅僧、と捉えたのである。そうした「像」は水上や唐木や加藤が小説という創造的方法で提出されたものであったが、それはまた戦後知識人が世情に対してどのように関わるかを考えるときに直面した「矛盾」を反映した「像」ともなっていたと考えられる。このようにして、一休の「像」を語るなかで、加藤周一などの戦後知識人が直面していた「矛盾」と「超越」の問題を考察した。

以上のように戦後の一休論を辿っていくと、それはいわば禅的な意匠を深く考察して語るることにより「伝統」と「近代」を再考しようとする戦後史の一断面であったことに気づかされる。しかもそのように禅が語られる際に、実に頻繁に立ち現れるのが、西田幾多郎や鈴木大拙の所論である。戦後史において、禅の「思索」と「体験」を徹底的に考え抜いて表現しようと苦闘した西田・大拙は、戦後知識人による一休論においても不可避の絶対的存在だったことがみえてくる。本論の随処に両者の名が確認できること自体が、戦後史的言説の一特徴といえよう。

各論を導いた一休の「像」(の性格)で顕著だったのは、自らが「伝統」を担う大自信を表明しつつ、それまでの(禅門の)「伝統」では直面することのなかった乱世に飛び込んでいった、ということである。いわば一休は、大自信と現実への対峙とのあいだで引き裂かれていく存在と考えられた。自分のみが臨済禅を担い得るという覚悟——故に墮落した宗門を唾棄すること——と、その宗門を滅ぶままにせず何らか支えねばならぬという使命感と、そのあいだを往還する存在、と捉えられていった。その両極性のあいだで矛盾しているようにみえながら、何もののにも縛られぬ真の「自由」を希求する存在として、戦後における一休の「像」は立ち現れて来た。そのような一休の「像」を通して、禅宗で伝統的に言われる「自由」——自ら由ること——を、近現代に生きる形で表現していたものと考えられたのである。戦後史の只中で一休の「像」を論じることは、「伝統」を向うに置いて「自由」を探究するものであったと結論付けられるだろう。

(了)